新古七才詩集

上之二

新古今和歌集巻第六

冬歌

千五百番歌合に初冬の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

天暦御時神無月とりあつめてたてまつれ

[illegible]

藤原定家

神無月ふるのやしろの時雨[illegible]

[illegible]

源重之

[illegible]

後冷泉院御時歌合のことを大井河のり
まうの為の紅葉浮水とよめるを海とよん
だる

藤原資宗朝臣

いかだもまてこそこしかは水上をいまこそわたる山あらし

大納言経信

あらし吹紅葉ながれぬ大井川こゆるせゝの水はたゆるを 白浪

大井川に向りて海紅葉満みなとゝ心とゝまる

俊忠

たなを水にぐるわかゝ紅葉のかゝれるをみて海大井川

深山紅葉こゝろ海を

ひとゝ所もとゞまらぬ山の紅葉あきはてゝ風はゝ落てを

影もなし

源俊頼朝臣

藤原清輔朝臣

ちはやふる神もいかきの紅葉かな竜田の川の錦なりけり

春日社歌合に紅葉を

月つゝみ

藤原定家朝臣

ちはやふる宿の紅葉を袖の波とゝまるをしらぬ

右衛門督通具

こゝろもとゝ時雨やはらふ紅葉ばを

後京極摂政

うつりもてゆく風のおとにおどろかれ
ねぬ夜の月をみちくるまつ山の
七條院大納言

ねぬ夜の月をみちくるまつ山の
峰の風をさ海にきくまの浦の
藤原秀能

山里の風をさ海にきくまの浦の
波の音にまがふ秋の夕暮
後鳥羽院

秋の夕暮
伝法 春日社司 大僧正慈円

秋の夕暮
かりがねの声ふるさとの
藤原定家

かりがねの声ふるさとの
野辺の夕暮
文内卿

野辺の夕暮
ながめやる方の空の
藤原資隆朝臣

ながめやる方の空の
月のみ
法眼慶算 宿曜師

月のみ
時しもあれ秋の夕暮
津守國基

時しもあれ秋の夕暮
ものとはば
西行法師

月を待ちつゝ乃ちを晴れ家わかぬあり[illegible]

前大僧正慶忠

神無月あらしふきつゝ敷てゝ庭の面の[illegible]

清輔朝臣

[illegible]

山家紅葉をいつかたつゝ

[illegible]

雲ふかく[illegible]

[illegible]

寛平御后宮歌合

[illegible]

神無月紅葉ちらす[illegible]

題しらず

中務卿親王

[illegible]

紅葉ちる[illegible]

中納言兼輝

紅葉ちるを[illegible]

十月ちるわさ[illegible]

紅葉

紅葉法師

紅葉の雨降りて[illegible]

題しらず

清原元輝

[illegible]

鳥羽殿にて接宿侍臣のよみ人しらず

後白河院御歌

風にちりし紅葉の落葉を掃ふ侍臣よりめぐさに賜れる

時雨を

前大僧正慈円

やらしたれ袖のうへの時雨をせき入れんの袖よ伊勢

冬歌中に

太上天皇

時雨にぬれぬ袖をひろひてつゆ侍臣よりめぐさに賜れる

人麿

影ゝらす

侍臣の雨を形ゝ袖の袋をあらそひて袖付

和泉式部

[illegible]

百首歌よみてまつりしに

二條院讃岐

おもかはりぬる浮雲を袖をひろひよせ侍臣

影ゝらす

西行法師

あきの野の小山の里の侍臣に袖をぬれる

道因法師

時雨ふりわ侍臣に袖をぬれぬ袖をひろひ侍臣

千五百番歌合に冬の

源具親

しらぬ人もつてもぬれぬ侍臣の袖のうへの[illegible]

題しらす　俊恵法師

みよし野の山かきくもり雪ふれはふもとの里はうちしくれつゝ

百首哥たてまつりし時　入道左大臣

まきの屋に時雨の音のかはるかな紅葉や深く散つもるらん

千五百番哥合に冬哥　二條院讃岐

世にふるは苦しき物をまきの屋にやすくも過る初時雨哉

題しらす　源信明朝臣

ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風

中務卿具平親王

紅葉をなにをしみけん木のまよりもりくる月はこよひこそみれ

宜秋門院丹後

吹はらふ嵐の後の高ねより木の葉くもらて月やいつらん

春日社哥合に暁月といふ事を　右衛門督通具

霜こほる袖にも影はのこりけり露よりなれし有明の月

和歌所にて六首哥たてまつりしに冬月　藤原家隆朝臣

なかめつゝいくたひ袖にくもるらん時雨にふくる有明の月

題しらす　源泰光

定なくしくるゝ空の村雲にいくたひおなし月をまつらん

千五百番歌合に

源具親

今よりは木のはかくれもなけれとも時雨に残る村雲の月

題しらす

晴くもる影を都にさきたてゝしくるとつくる山の端の月

五十首歌たてまつりし時

寂蓮法師

たえ〳〵に里わく月の光かな時雨をおくる夜はのむら雲

雨後冬月といふ心を

良暹法師

今よりそ旅ねかまし枕を時雨ける空としみえてくもる月かな

題しらす

曽祢好忠

露霜の夜はにおきゐて冬の夜の月みるほとに袖はこほりぬ

前大僧正慈円

紅葉はゝおのか染たる色そかしよそけにおける今朝の霜かな

西行法師

小倉山ふもとの里に木のはちれはこすゑにはるゝ月をみるかな

五十首歌たてまつりし時

藤原雅経

秋の夜を嵐にそなる月のうつるまを拾ひ侍

[illegible]

武子内親王

風さむみ木の葉の時雨ふる時毎くあるかな夜の[illegible]

殿富門院大輔

我門乃かわの面の面よりのみ[illegible]のこゝろ[illegible]の月

冬枯の杜の木葉乃霜のうへにまたちまち月乃新[illegible]

[illegible]百番[illegible]奇合よ

皇太后宮大夫俊成女

ちゝ[illegible]くさしの花よ新[illegible]

霜結ぶ神乃[illegible]

右侍従通具

[illegible]千首[illegible]

新[illegible]

藤原雅経

橋上[illegible]

法印幸清

かゝ[illegible]

源重之

夏かわの[illegible]

藤原道信朝臣

冬歌中に

太上天皇

冬ぬのゆきをはらふ袖のあけぬるものはかなしき時

百首歌たてまつりし時

摂政太政大臣

ちはやぶるかみもさびしらぬそらもなほ雪降るなりけり

崇徳院御時百首歌たてまつりけるに

藤原清輔朝臣

君こずは独ねられぬ冬の夜をなにとかはせのあけぬるらむと

題しらず

自天皇后宮大夫後鳥羽

霜枯れのそことも見えぬ草の原消ぬとはなれぬ冬の夜の月

百首歌中に

前大僧正慈円

霜さゆる山の風ふく夜のしも置きそふる月の影しらぬ

賀茂好忠

草ばかりよもぎ生ひ添ふ宿なれば冬の夜の月

中納言家持

ひさかたの月の桂の枝ならばこれ見ぬ人の名にはたのまむ

延喜御歌

[illegible]

延喜十四年当座のうちつかまつる菊宴の

[illegible]

中納言為輔

菊花をわけてやどらむ白雲の

[illegible]

坂上是則

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

西行法師

崇徳院より十首召しありて月つねの事なる時

大納言成通

[illegible]

西行法師

[illegible]

康資王母

[illegible]

恋哥とてよみ侍りける
守覚法親王
むかし思ふさ夜の寝覚の床さえて涙もこほる袖のうへかな
百首哥奉りし時
立ぬるゝ山のしづくも音たえて槙の下葉にたるひしにけり
題しらず
皇太后宮大夫俊成
かつこほりかつはくだくる山川の岩間にむせぶ暁の声
摂政太政大臣
きえかへり岩間にまよふ水のあはのしばしやどかる薄氷かな
枕にも袖にも涙つらゝゐてむすばぬ夢をとふあらしかな

五十首哥たてまつりし時
ゑ上やあらしのさむさに清瀧川にのこる白浪
百首哥たてまつりしとき
かたしきの袖の氷もむすぼゝれとけてねぬ夜の夢ぞみじかき
最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所
太上天皇
橋姫のかたしき衣さむしろに待夜むなしき宇治の曙
前大僧正慈圓
網代木にいさよふ浪の音ふけてひとりやねぬる宇治の橋姫
百首哥中に
式子内親王

見るまゝに冬は来にけり鴨のゐる入江のみぎはうすごほりつゝ

摂政太政大臣家五首歌合に湖上冬月

藤原家隆朝臣

志賀の浦や遠ざかりゆく浪まよりこほりて出る有明の月

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

ひとり見る池の氷にすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

題しらず

山部赤人

うば玉の夜のふけゆけば楸おふるきよき川原に千鳥しば鳴

さほの[illegible]千鳥のなくを[illegible]侍りける

伊勢大輔

[illegible]さ夜ふけゆけば[illegible]
みをの[illegible]

能因法師

夕されば志ほ風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴なり

題しらず

重之

白浪に羽うちかはし浜千鳥かなしきものはよるの一声

後徳大寺左大臣

夕なぎにとわたる千鳥浪まよりみゆるこじまのくもにきえぬる

堀河院に百首哥たてまつりけるに

祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の浜の濱ちとり浪たちくらし夜半になくなり

五十首哥よミて奉りしに

摂政太政大臣

月そすむ誰かハこゝにきの国や吹上の千鳥ひとりなくなり

千五百番哥合に

正三位季能

さ夜千鳥聲こそちかくなるみかたかたふく月に塩やみつらん

最勝四天王院の障子になるみのうらかきたる所

藤原秀能

風吹ハよそになるみのかた思ひおもハぬ浪になく千鳥かな

権大納言通光

浦人の日もゆふ暮になるみかたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入内屏風に

正三位季経

風さゆるとしまかいそのむら千鳥たちゐハ浪のこゝろなりけり

五十首哥よミて奉りし時

藤原雅経

こゝろやさてもいく夜の数そへて恋ひ乱れ独寝

堀川院に百首哥よミてたてまつるに

河内

湯原王

能因法師

法性寺入道前関白太政大臣

人麿

雪月花の一座後

中つかさ

膳酒上人

藤原基俊

初雪

冬ごもりせる

拾中納言長方

第武部

[illegible]初雪

百首歌に　　式子内親王

さむしろの夜半の衣手さえさえて初雪白し岡の辺の松

入道前関白太政大臣に歌召ける時家の歌合に
雪をよめる　　寂蓮法師

ふりそむる今朝だに人の待たれつる深山の里の雪の夕暮

雪の朝後徳大寺左大臣のもとにつかはしける
皇太后宮大夫俊成

けふはもし君もやとふとながむれどまだ跡もなき庭の雪かな

返し　　後徳大寺左大臣

今ぞきく心は跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれども

題しらず　　前大納言公任

白山に年ふる雪やつもるらん夜半にかたしく袂さゆなり

夜深聞雪といふ事を　　刑部卿範兼

あけやらぬ寝覚の床にきこゆなり籬の竹の雪の下折

雪の色のをかしきとし暁雪と山雪とみえかはらぬを見て
よませ給ひける　　高倉院御歌

たえぬ山路やいかに白雪をふみわけてとふ人のあとかな

ふる雪にちりかかるなる初雪の…

きちかくとみくに上東門院に侍りける女房の
つかはす　　藤原家隆朝臣
雲ゐにたちのぼりぬる煙をば野辺の雪とやながめ
野辺の雪をはかなき煙とやながめん　　藤原国房
さりとてはいかにせよとてをのへなる松にかゝれる雪の
百首歌たてまつりしとき　　藤原定家朝臣
ゆきとのみ袖にふりかゝるさくらばなかすみの
関にはなにかとまらん　　藤原為家朝臣
おもひかねさくらさへぬる春の夜の雪にぞ
家は百首歌よみ侍りける時　　藤原有家朝臣
雪にまがふ花の白雲
春の夜の雪にぞ
雪にまがふ花の白雲　　前関白太政大臣
春の夜の雪にぞ

たこの浦よりすぎくれば白妙の藤の花咲きにけり

延喜法皇御製

紀貫之

雪のうちの梅の花を折りて

寄花法親王

雪の山里の梅を折りて

皇太后宮大夫俊成

雪ふれば冬ごもりせし草も木も春をしるらん山の梅

小侍従

かき暮れば春を忘れぬ梅の花ただ一ちらに雪ぞふりける

前大僧正慈円

春ごとに花のさかりはあれにけりとしふるかひのなきみなりけり

曾禰好忠

春の来ぬ人の心の花さかば物思ふ我ぞ春なりける

寄花法師

春きて通ひけるかの人のもとにつかはしける梅の白雪

百首歌中に

太上天皇

ぬしやたれ花とも見まがふ白雪

千五百番歌合に

上西門院兵衛

草も木も梅にならぬはなかりけり雪もてはやす花の色かな

百首哥よみける時

崇徳院御製

花(ハ)雅(ナ)しの野風のたもと薫るなり香のもらぬ世にもなるかな(来ノ字)

内大臣に侍りける時家哥合に

法性寺入道前関白太政大臣

みわたせは雪にまかふ梅の花あさ日の野辺にかをりきにけり(求ノ字)

京極関白前太政大臣高陽院哥合に

前中納言匡房

久かたの月夜にかよふ梅か香に袖さへ匂ふ色はありけり

霞ける春の夜のみ月まちて匂ふ梅かな

左近中将公衡

梅か香にかくれてやどる夜の月袖の涙にもたとへけるかな

権僧正永縁

ゆくへもしらぬ梅か香の夢にのみ世にもあるかな

百首哥よみ侍りける時

式子内親王

見ぬ梅の香に雪ひ山里にすきし春風の匂ひをさそふ

歳を経ること久しかりけれ。

西行法師

をしつるかなとなげきてやまじとこそおもへども

年ぞ経ぬるよりもあはれ

上西門院兵衛

思ひかねてなほ恨みんと思ふこそ

思ひ知らるゝ人の心の

わびしさは報ふ方なきものとなりけり

大納言資季

後鳥羽院御歌

後鳥羽院御宇十首哥よみ給けるに歳暮哥

後恵法師

あはれとも言ふべき人の思ほえで

百首哥奉りし時

小侍従

思ひ出でもなほ恋しきは

西行法師

憂しとのみ

前世の罪とは知らでやみぬべし

いとゞ思ひ沼の深さを

前大僧正慈円

弁れゆて浮世乃美のさむし一首ゝゝにたくとはいけ

撰律師隆賢

わきえのわか弁れ首ふ置筆て秋のり乃く御れぬるか

百首こゝをかしこ記

入道右大臣

いそられ故弁れ筆こちわくれ板積首へよれ世きし表ら

さしのくれおみ出れ老ぬらくとを頼てよめん読合

和泉式部

かゝる筆庭弁れ前本よ老んなきわたる老ぬらんとなわ出かきく

入道前関白百首哥よみ読けれとよ歳

筆のさゝ語をよみてあわ律うつしきあ

後徳大寺右大臣

石の安和歌乃川のなき枕とやくともさはれ筆よきうか

士卿門田大臣家りて海為歳筆こ以字

あ語をよみあ

藤原有家朝臣

行ほと行きもれ御筆のぬれ袖さきぬく袖よ浪やかゝらん

寂蓮法師

老乃あとこそけふあわしちわくれかれ旅ことし今に来れ松に

千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成
けふことにけふやかきりとをしめともまたもことしにあひにけるかな

新古今和歌集巻第七

賀歌

みつきものゆるされて国とめるを御覧して
仁徳天皇御歌
たかきやにのほりて見れは煙たつ民のかまとはにきはひにけり

題しらす
読人しらす
初春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを

子の日をよめる
藤原清正
子のひしてしめつる野辺の姫子松ひかてや千世のかけをまたまし

題しらす
紀貫之

[illegible]代の年[illegible]数をも白妙[illegible]流の面さま[illegible]あれを賞々
亭子院の六十賀屏風よりわりかけるさま
とりどりの名所
[illegible]葉おのの野[illegible]をの[illegible]五代をへてはるかにも
延喜帝御屏風哥
[illegible]今[illegible]年をとりけてもゆくすえ[illegible]
祐子内親王家[illegible]
後生菩提院[illegible]
[illegible]代より[illegible]賞[illegible]
七源の[illegible]
大[illegible]門右大臣

[illegible]の[illegible]
延喜帝御屏風哥
伊勢
[illegible]
貫之
[illegible]
[illegible]
躬恒
[illegible]
[illegible]
藤原豊風
[illegible]川の[illegible]
延喜帝御屏風[illegible]

貫之
いのりつゝ猶長月の菊の花いつれの秋かうゑてみさらん
文治六年女御入内屏風に
皇太后宮大夫俊成
山人の折袖にほふ菊の露うちはらふにも千世はへぬへし
貞信公家屏風に
元輔
神無月もみちもしらぬ常盤木に万代かゝれ嶺の白雲
題しらす
伊勢
山風はふけとふかねとしら波のよする岩ねはひさしかりけり

後一條院生れさせ給ひて九月つきくまなき
かりける夜大二條関白中将に侍りけるわか
き人々さそひ出て池の舟にのせて中嶋の松
かけさしまはすほとをかしくみえ侍れは
紫式部
曇なく千とせにすめる水の面に宿れる月の影ものとけし
永承四年内裏にて歌合せに池水といふ
こゝろを
伊勢大輔
池水の世ゝにひさしくすみぬれは底のたまもも光見えけり

堀川院乃大嘗會の御時、ゑの日みかめてをれば、
みわて元時の御代に紀伊国ゆりの
六條右大臣

第六代の子孫世々数を重ねて、ひろわふをみる
天喜四年后宮の宮合の歌をとる人は
後冷泉院
宮内

第六代の子孫世々数を重ねて、
寛治八年実房の歌をとる人は
堀川院
宮内の御歌と
康資王母

五代と松のを山の松の木をけづりて、いのちをたすけたに
後冷泉院おはさなくに松ばかりの御時に成れば
松ばかりの子よりこの海をせきとめよりえんはなし
大蔵之丞

桐生れもとゆの山乃こ松原とりもとゆ世々をけづりもえん
永保四年四月裏子日ゆ
白川院

子日とて松のをれたちの小松原千代をかけこの世にもとゆみる
大納言俊信

松の中納言通俊

孫のひとゆ師通の小松をもとりて年をもるくをひらく

白川院

兼盛二年四月裏合ニ桜乃花と人々詠ける

前中納言匡房

春ふかみ　ちりのこりたる　山の桜　ちるを惜しむ　人ぞ　なりける

読人しらず

ちるを惜しむ　人ぞ　なりける　桜花　ちりのこりたる　山の桜

二條院御時花有春遅と人々詠ける

ちりのこりたる　山の桜

第五代　白川院御製

桜花　ちりのこりたる　山の色に　ちるを惜しむ　人ぞ　なりける

刑部卿花歌

桜花　ちりのこりたる　山の色に　ちるを惜しむ　人ぞ　なりける

桜花　ちりのこりたる　山の色に　ちるを惜しむ　人ぞ　なりける

第六代　後鳥羽院御製

桜花　ちりのこりたる　山の色に　ちるを惜しむ　人ぞ　なりける

[illegible]

千又百番合

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千又百番合

藤原定家朝臣

八月十又夜和歌所合

[illegible]

[illegible]

[illegible]

常蓮法師

[illegible]

和歌所の園用まなりてよめる

源実長

[illegible]

建久七年八道家家百首歌

[illegible]

前大納言隆房

[illegible]

[illegible]元年入道前[illegible]白大臣[illegible]

[illegible]

藤原清輔朝臣

[illegible]

日吉社宜[illegible]仲七十賀[illegible]

[illegible]

百首[illegible]

後徳大寺左大臣

[illegible]

家[illegible]

[illegible]

[illegible]

春日山部[illegible]

天暦御大嘗会[illegible]基[illegible]中国中山

[illegible]

長和[illegible]年大嘗会[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛治二年大嘗会屏風 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

[illegible]

伯中納言資実

[illegible]

新古今和歌集巻第八

哀傷歌

影こそ

[illegible]

僧正遍昭

[illegible]

小野小町

延喜十年二月十九日四十五歳

醍醐乃みとのくれ[illegible]

三條右大臣

定もし

定方

[illegible]

中納言兼輔

[illegible]

[illegible]院
正暦二年[illegible]月十七日
朝[illegible]

[illegible]

[illegible]

宮家御所母乃思ひよりなり春のよ雪のよりハ
しをり

摂政太政大臣

春霞すこしゝ立そめきゝすゝめ花乃思ひなるかも

前大納言光頼卿

春風のなびかぬ枝とさそひ来て花のにほひ
ゆかしなるかな

前右兵衛督推方

あだのゆゝ姫とさそひ来て花のにほひ
六條摂政こゝ行くゝ姫うゝとさて行くゝ牡丹
乃さかりく行けるとおもひて如形ゝ
ゝて行ゝ

大納言大貳重家

かゝんとてゝゝ行かなゝ家さかりゝ草のかゝ
なさるゝゝ姫ゝ行くゝうゝとさゝゝ
菖蒲をみくゝ行きゝ

高陽院内侍(ユウレイ)御手

わゝ姫草ゝ花とうゝとさて遊ゝ花ゝ
なゝゝく事ゝ行ゝ春月ゝ
ゝけゝ

上西門院兵衛

ゝゝゝ

わゝ先葉引ぬゝ（中宮）院被申むしろ事侍そ申ゝ

清原

九條院　宮女し

ほとゝきす　なたる松の　なつかしき　ねをとゝめて　ゆく方

すゝ行けり　女なくゝ　わかれ　ゝ藤原為家

相長書　為　かゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

皇后宮院　法性寺忠通娘　近衛院之母

小野宮右大臣　殺し

よそ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

藤原為頼朝臣

ひとわ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

小式部内侍　殺とゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

きて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

和泉式部

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

上東門院

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

白川院清河中宮　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

わさらに京にてなく亟しく草ばらの家を形みて思ひ出けるや
一条資子内親王歌をよみあひくむしの事をも
中しくて歌をよみこれけり
内侍

神ぬさ〳〵秋の名をたにわすれぬ清しわさちの家をとひ清く
きこゆるぬ事おとくなめて清くあり清く結
けり日上東門院中宮とも参る時つくりの
一條院御哥
結風乃寒れぬとわよ寒をきて鹿をあはれ記
秋乃こゑなさるる記をよとくれあるへ
大貳三位
別々なんをこれ神とものこゑをよやそふらん秋乃夕寒
也
よるん人をこ
とにそ家寒と安しわ清きをのこゑ記をつ記
廣義公れ西なくなみわて後女郎花をみく
清慎公
女郎花ん乃ゑなくさ南くいとくむしの秋を意記
除正平為号歌をあをくまて歌乃をまこ後
和泉式部

寂光院に御方様吹上と出風の花を蒔て神乃うえに供養
信一位源師子かくれ給へ字治より新御所の
よつらせ給
知恩院入道亦実白太政大臣
神ぬし吉兼乃うち堂に入給へ
法福寺にまゐり給て給源野より大納言家
うえ乃れ給へ字治より洛よりかへりて給へ
さらに亦家乃ぬけ乃れ野色に出て黄昏に出給へ
公時御母方さかへて頼信乃うえ後大納言家
りに申給へ

摂津中納言後忠

後徳大寺大臣
母乃方さかへ
給へ字治乃宮乃さわくに出給へ
御乃方さかへ
給へ字治乃宮乃見給へ

皇太后宮大夫後成女
今こそ乃ぶ乃世乃さこの野色に
母方に乃ぶ
給へ字治乃宮乃見給へ
藤原定家朝臣
西園寺乃家に
父秀家方まうゐて乃秋芳風懐舊の事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同行あわせ給へる人々なかにそれ
思ひいでくるあり　前大僧正慈圓
あさとこのなみさわぎや松のみち
世のなかのひとのこころや秋法師　皇太后宮大夫俊成
いとく吹たれて
うもれ井の水のあらはれ出ぬ嵐よこれや別れなるらん
宮家の御母方かはりて後鳥羽の墓所
なく堂よりこの世のあはれなる
秋よりこの夜半もとはしなる松風とあえなや苔の下にうもれ
鶴川院うせ給て後神無月風の音わるれ

きこえ給へる
　　入我上人
世のなかの人の色のかはるにつけ
　　藤原定家朝臣
あはれとこの方かはりて行月のあるよ人の夢
　　前大僧正慈圓
あはれとこの秋の雨
　　源為義朝臣
源為義朝臣方の海のもとの又乃年月をへて
　　法因法師
命のあるうちの秋を月にこそ別しかなしかりけるかな
世のなかの人こそ指くなるなれ中将
宣方朝臣方のかはりて十月ばかりの白川の家の海

[illegible]れ一葉のこれるとたづけるを

前大納言公任

[illegible]山里[illegible]と人[illegible]

十月[illegible]水[illegible]

[illegible]前大僧正慈圓乃

乃祢宮月宮の哥あるをよみ給ふ

侍し中ふ

[illegible]

前大僧正慈圓

[illegible]

雨中宮常とふらせたまふを

左大臣

あやめ乃かをとゝめたるやまとなでしこ

後拾遺ノ詞

枇杷殿太后宮

宮の[illegible]の中に准ずとなくてさうをう

[illegible]

相模

神宮月三[illegible]

右大将道綱母

[illegible]

出羽門右大臣妻

[illegible]

秋文門院御乃御[illegible]

さゝ[illegible]を人[illegible]

[illegible]

[illegible]

何事も今はなき物の哀なれば
後朱雀院おくれ給ひて東山院白川よりとぶらひ
給ふとて

藤原重子 大二條殿母

思ひきや君が家をいでぬなりあなとあはれ
わきもかわらぬ身なれかわらに

源道濟

たのもしかりしかたのこころ世にたのこころ
後一条院中宮おくれ給ひしのち
哀なれ今をれ哀やらん主なぬ山路よりとも

雅この世にあるうつくしむかなよとあり法の法をぬ形こそなれなく

歌

あきさめと思ひ分まりをつい色をそなあるれかあるに紙為

信西的号これ前後なつくみわて涙のくも

つくるにそわもこそして草なひ色をあてまて

さ海よなめにろるをみく

為政卿をふとてきこれわぬ行くに色紙に行かか

世れたるのよまりてをけく後みられくる名

仏武部

加賀守朝云

わつ有くかるあ為を絵をえ仕く

忠武部

ろ人の煙よなる色をみわ名うむつまり紀伊の海の浦

後朱雀院これ行く後源三位ろりとにつる

ろろ

乳母

あこれ第つのなる野多色れ煙よてむのきこてれやとと

源三位

歌

なり人君のこと煙の海ろひなて立をこれ為養のうすと

大江為言ひ海よりわてろ陸てなふ海

ひわれろ紫わ紫みくを伯よろれてに

園よりたくみわにたわときて

祇園法師

あら孔雀命をもつまはしまにんのわしに捨らさまま

題しらず　大江匡衡朝臣

孫王貴人をもつかつかめてこゆるやうつくわ〜世ゆる春

撥軍物語為朝ひとりかめてはつひよ人ろろ鏡を佛

よ行くらせ伯ろてよ袋

うつるもむ貴人新つ物ろてみろよ思ひのまひるこが

かよひろ女乃ろ女乃ろあくなわ伯よろろころかさ

とふよあろ姫人ろ物のまろしにおさむろて

ろいてろ人伯ろふろ

梅察使公通

かちよろむかしろの袋のこそあろされおられこ南ろ殿

禎子内親王（三条院皇女母は中宮藤原氏）

ぬ伯ぬときてろかめ為みられ伯事もろ

ろぬやろの伯ろろもてろむろ思ひかられて

女房より伯ろろ

わろ七川寄おろ孔雀ろ孫ろろや貴ろかけて

中院右大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

弾正法師

[illegible]

[illegible]

西り法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右大将頼朝

[illegible]

なくみわのあるじ乃数をそへにかさて奇しん

行ゑよ

法橋行遍

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はれとこゝとわかぬさくらかな　第一海

うるとてわつまよりあのよ島をれぬ人ぞうそ

し侍れん　　右兼宣卿補

しのぶまふゆをしのぶ日をそてゝ数をそひこ島ゝ

業長清門とたゝ絶えてまつわろとみく

人麿

あかつれわかこゝろ君ゆゑ月日とゝもて恋渡るゝ

題しらず　　小野小町

わびつゝなれぬ数ゝ梅世中に長つれぬ日をて頼ん

在原業平朝臣

ゝ乙ゝ行そとゝ乃ゝ

更衣乃服をて月いまてわまつとみさまひく

延喜御歌

ゝ乙れかゝとわかれ雲深乃こゝ日ゝて梅それ者ぬる

梅ひをて乙の家ゝ乃とれわ者ゝをそれ家よ

日ゝれ草れ者ゝ侍れ者ゝ乃ゝ

中納言兼輔

家ゝ人を思かしてゝ乙草草ゝ乃ゝ乙ゝ乃ゝ

やゝひをゝ乃ゝ乃ゝ者ひをゝ乃ゝ侍ゝ

ゝたゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ者ゝ乃ゝ

年ふる人の行ゑをあひてみむとてかの
月のかつらの中をかわりてよろづのことに
やまのひかりとなりてかくれにけるを公卿
たちよりてよめる

藤原季縄 交野少将 参議上手

ちりぬるをそなたのかぜとおもふかな
世はなれぬるかつらのもとに

世はなれぬるかつらのもとに七月十四日の夜行けり

中務卿具平親王 村上御子

墨染の袖にとかはなくに
なにをなにとかはるものとてそ
なれぬるかつらのもとに

墨染の月のかつらのもとにて人の世はかなさをなげくこころを
あらぶ

新古今和歌集巻第九

離別哥

みちのくにまかりけるときに侍りける人に装束とらせて

よみ侍りける　紀貫之

君こゆる山風さむしかたしきの袖やかへすと思ふ

遊子

思ふ世をよもやとすらん山ぢにまどふ人にあらじとぞ思ふ

わかれ路に侍りける人の家にまかりて侍りける

藤式部

ゆく末のうきかなしきを思ふ

[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣

みちのくにまかりくだりける人に

みくまのにまかりあひてのぬしとなりて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原范永朝臣

[illegible]

大宰帥隆家卿

[illegible]

枇杷殿大納言

後拾遺ノ作

[illegible]

[illegible]

源右大臣　恒佐

[illegible]

大江千里

[illegible]

[illegible]

道命法師

[illegible]

先日六位乃七月廿日ハ[illegible]
[illegible]
の[illegible]

加賀右衛門

[illegible]
[illegible]
[illegible]

中納言隆家

[illegible]
[illegible]

藤原実方朝臣

[illegible]

七月ツコモリ八日さうこの[illegible]

第中納言医房

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

後三條院御方

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

藤原基俊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三位の中将清盛をもとして出あらそふ人々八別
行みくらの人々なけ歌
あめとつちとをしへたやすくさしとつかんなて為つけかくた
さわとも思ひ給はしとてのこの山海を越ぬ道
とゝ紙ぶ東へとかめきるとて師光儀しなる
いかあろ　道因法師
かわらん貌を捨らんを捨へとも老ぬる身ゝ定かなれ
題しらず　皇太后宮大夫俊成
ふるれめれ樵乃ゆとゝ思ふまて老ぬなみとゝ人ゝ
祝部成仲

別ふ人命をみとやこゝ見れ山を見れ山をかなしさ
見ぬ所をこそ所詠ぬ所ぬ所を恋へ清
藤原定家朝臣
新乃かゝへかめ人々みとゝ人ゝてとゝめけ歌
雅的歌
かゝ百と思ふかなとに為て志ゝ為ゝ為ゝ樵乃紅葉
世ゝ人ゝ海ゝ百ゝ人ゝ世ゝ月ゝ人ゝ為ゝ為ゝ家
とゝ清ゝ人ゝとゝて　源ゝ人ゝ志ゝ源
新ゝとゝ人ゝ世ゝとゝ人ゝ為ゝ為ゝ月ゝ人ゝ為ゝ為ゝ世ゝ
とゝ紙ゝ人ゝ為ゝ為ゝ人ゝ為ゝ為ゝ人ゝ為ゝ為ゝ

大義帰行宗

別れをしぬれば人の国へゆかわかれをしぬれば人の国へゆかわかれをしぬれば人の国へゆかわかれ

山上憶良

百一 いざこどもはやくやまとへ[大和]おもふどの[思ふ殿]ものまちぬらん[待ぬらん]

百二 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百三 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百四 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百五 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百六 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百七 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百八 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百九 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

大納言藤原

百十 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百十一 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

百十二 ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]ながのうらをこぎてわれはやまとへ[大和]ぞ[ぞ]

在原業平朝臣

信濃なるあさまのたけにけぶりたつ[煙立つ]をちかたびとにあとはとはばや[跡は問はばや]

ゆくへ[行方]なみ[なみ]

駿河なるうつの山べ[宇の山べ]のうつつ[うつつ]にも[にも]ゆめ[夢]にも[にも]人[人]にあはぬ[あはぬ]なりけり[なりけり]

延喜御代風景

紀貫之

草枕ゆ[ゆ]風さむみ[さむみ]ねぬ[ぬ]ぬ[ぬ]ぬ[ぬ]

題しらず

[illegible]

玉山忠義

[illegible]

侍従[illegible]

[illegible]

[illegible]

落原捕昭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

立ちかへしと夜こそわけぬそのうへや袖やうらみをひるかなわ

題しらず　清原宣有

秋かぜにうちなびくをみるつゆもこぼれぬ袖のなみだなりけり

へ唐しら絵をかきたる屏風の秋の海つきのこゝろ絵

たれかし

旅衣あらぬ紙にてきこしめしたれもとゝれ

たゝぬ海の海にわてわそいきをうよみよ

海わ為ゝ今夜ゝうわいなひ秋をしまつる風よ為ゝ

法橋貴慈

春宮賀方別宮

いそれ海ゝのうゝこゝ秋ゝ行ゝ絵けるゝ

ゝ為ゝわきゝ同ゝをゝ〇しなひくゝれ

つゝわかゝへゝ為ゝとゝわゝ〇のみゝゝ

秋ゝ行者みゝゝ

太和

ゝられゝとゝ物ゝとゝゝ為ゝ絵きゝ

大僧正行尊

我ゝとゝ〇ゝ為ゝ〇ゝ為ゝ為ゝ〇ゝ為ゝ為ゝ為ゝ

ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ

中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

紫式部

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

天王寺よりいかるがへまいるとのうちよりあわれ
肥後
前右大将信家
さ夜ふけぬ山風はかすかに
あひかうとてそうの人のけ
大納言源信
橘為仲朝臣の家にまかりて
恵慶法師
わかよをこそ橘の家もかなしけれ山風
後冷泉院御時うたあはせ
右近中将資綱
ひとり

あれはてぬ
あはれとかわれ
あはれとかわれ
てらしかねつる
花ゆえとこそ
行のこの橘
清川院百首
山ぶきそ
大納言師頼
菓花橘の

水鳥猿宿雪

源師賢朝臣

いそのかみ　ふるの猿松　ふるやまの　ふるの白浪

せをのかすみ　ふるのの雪

（四上　冬列し）

大納言為信卿

猿のすむ　ふるの松原　ふるの雪　ふるの白浪　ふるの

ゆき　ふるの

みなの浦ゆ　ふるの猿の　ふるの雪　ふるの白浪　ふるの

猿宿雪

藤原定家朝臣

松根猿　花の根ゆ　ふる雪の　ふるの白浪　ふるの

みちのくの　ふるの猿の　ふるの雪　ふるの白浪　ふるの

ひかりくも　ふるの猿の　ふるの雪　ふるの白浪　ふるの

橘為仲朝臣

月人をとこ　ふるの浦風　ふるの猿　ふるの雪　ふるの

せをのかすみ　ふるの猿の　ふるの雪　ふるの白浪　ふるの

ふるの

大江為言

草花猿　ふるの猿の　ふるの雪　ふるの白浪　ふるの

寄花法親王家五十首歌

猿の哥

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]

藤原定家朝臣

[illegible]

藤原家隆朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

猿丸奇とてうたはれける

前大僧正慈圓

あしびきの山どりのおのしだりをながながしよをかこちてんとは

源頼政

ながらへばまたこのごろやしのばれむ

百首奇とてすまひのとき

越前

つきをまちてやとりしかたのあまりにはるかにみるかな

百首奇とてすまひのとき

宜秋門院丹後

きりぎしのうへの濃とりのこゑまちてあかしかねたる

前中納言定家

風さむみ伊勢の海にたちのぼるあまのたく火のけぶりなびく

前中納言定頼

いそがばまにあはじとおもへばかたがたにくだけてものを思ふころかな

百首奇とてすまひのとき

式子内親王

物思へば沢の蛍も我が身よりあくがれいでぬるかとぞみる

花ゆゑに人まつ山のほとゝぎす

五百番奇合

皇太后宮大夫俊成女

ものともわかぬ夜はの月の雲がくれ

旅にてうたよめる　　権僧正永縁

白雲の立ちかくす峰の桜花　春ぞ霞の衣なりける

雲居にて行家と歌をよみかはしける　　大納言俊信

山賤の垣根ばかりうゑおきて　桜咲かばと思ひしるらん

桜咲かば思ひ出でよと言ひしかど　春の暮にぞ会ひ難きかな

藤原定家朝臣

いとはるばるとおもひ宿をかりかねて　桜の花の陰にぬれぬる

桜哥とてよめる

桜の枝の折るまで散りぬれば　春の夕の風ぞ残りける

藤原家隆朝臣

春ぞ来ぬ　霞の色もあらはれて　ほのぼのとあけゆく山の端

藤原雅経

白雲の立ちかくす峰の桜花　春ぞ霞の衣なりける

源家長

うたがはじ　春の野原に行くぬるの山の月ぞ　霞の衣

和歌所にて合せる霞中山月

皇太后宮大夫俊成女

[illegible]

雅親朝臣

いろいろにうつるあさぎりの夕煙にたちこめられぬ

宜秋門院丹後

[illegible]

藤原秀能

草枕ゆふべのあめになれぬれば[illegible]

有家朝臣

[illegible]

石清水奇合は旅宿嵐とかよふ事を

[illegible]

藤原業清

[illegible]

鶴長明

[illegible]

民部卿成範

[illegible]

[illegible]

禪性法師

[illegible]

藤原秀能

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行法師

きゝわけぬ人の心のあやなさは
猿哥とて
四ひきとゝのゝしるまきとりあつめ
猿の声
熊野へまいりて
左上天皇
ゆくまゝに山風わたる声さへ
夜さむしかなん